

## Kyoto 演劇フェスティバル講評 劇団青空「見上げてごらん夜の星を」

劇団青空のオリジナル戯曲「見上げてごらん夜の星を」は、ドラマを推進させる御都合主義に目をつぶれば、比較的良く書けた作品なのかもしれない。中心となるのは、認知症の疑いが出始めた父とその家族の物語である。観客の反応も上々で、会場ではすすり泣く声も多かったように思う。確かに高齢化社会におけるこうしたテーマ設定は、多くの観客にとって切実なものであろう。また、劇団青空の観客層を考えても、舞台上で演じられた物語が、観客の気持ちを直接代弁していたと言えるかもしれない。作品はある意味では大成功しているとも言えるが、その成功の裏には、観客の視座が関与しているように私は思う。つまり、どういった態度で観客は作品を享受しようとしていたのか、である。

今年私は Kyoto 演劇フェスティバル参加作品を講評者として4本拝見したが、そのほとんどが、いわゆる古い演劇であった。決して否定的な意味合いで古いと言っている訳では無いが、私の見た作品のほとんどが「観客にお尻を見せず、前を向き、大きな声で台詞を話す」ことを当たり前のルールとしていたように思う。あまり認めたくは無いが、一般的にもこういった姿勢を当然視するのがまだまだ優勢なのだろう。私の受けた印象では、劇団青空も「観客にお尻を見せず、前を向き、大きな声で台詞を話す」ことを目指していたように思うし、観客の大多数がその姿勢を当たり前として受け止めていた。左程に日本の劇場文化のレベルはまだ低い、と私なんかは思ってしまうが、話をそんなに広げてしまうと收拾がつかなくなるので、話を劇団青空に戻す。

観客が劇団青空の作品に感動したのは、いいお話であるからというよりも（ああいった話は誰だって書ける）、彼らの演劇に対する姿勢を古いと思わず、むしろ努力の結晶だと受け取る観客が多数いたからだと思ふ。辛辣な言い方に聞こえるかもしれないが、作品が育たなければ決して観客は育たない。私は劇団青空の作品を見ていて、観客や作品を育てる姿勢よりも、どちらかと言うと、何かを守る姿勢を強く感じてしまった。彼らが何を守りたいのか、それは守る価値が本当にあるのかどうか、私にはよく分からなかった。

一般的に演劇には様々な前提がある事は私も知っているが、前提に準じて創作する事と、前提に甘んじて創作する事はまるで違う。人間の一生懸命さは、いつだって否定し難い輝きを放っているが、敢闘賞や努力賞だけでは、芸術の世界は成り立たない。Kyoto 演劇フェスティバル全体を通じて私が感じたのは、芸術興行としての演劇ではなく、発表会としての演劇である。発表会が求められる場もあるし、芸術が求められる場だってあるが、私はまだ Kyoto 演劇フェスティバルがどこを目指している場なのか、正直分かりかねている。とはいえ、講評が頼まれた事実を前向きに受け止めれば、改めて Kyoto の懐の大きさに恐れ入るばかりである。そして劇団青空には、是非とも良い作品を創り、良い観客を少しずつ育てて欲しいと願う。劇団青空が結成3年目にして、発表会以上のクオリティを目指している事は、誰の目にも明らかだったはずだ。私は少なくともそう思った。

伊藤 拓（演出家）

## 劇団 青空「見上げてごらん夜の星を」

私も島根に八十九の母が一人で住んでいます。心がじわっとなりながら観ました。わかりやすいストーリーで楽しかったです。何よりも出演者の皆さんが楽しんで演じられていて、好感がもてました。これからもがんばって下さい。

竹橋 団（劇団京芸）